Jigsaw 法でアクティブラーニングを目指す

―高度な英文を素材に―

大阪府立学校指導教諭（大阪府立鳳高等学校）　溝畑　保之

京都教育大学英語の教え方研究会9月例会
外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会9月例会
日時：２０１５年　９月１３日（日）１３：３０～１７：００
場所：京都教育大学ＣＡＬＬ教室
参加費：　ＬＥＴ会員・英語の教え方研究会会員　無料
京都外国語大学英語教育研究会会員　３００円
学生　２００円　一般　５００円

グループ・ワーク、調べ学習、体験学習、プロジェクト学習、ディスカッション、ディベートなど、学習者が授業に能動的に参加しながら学ぶ方法を総称して「アクティブラーニング(ＡＬ型授業)」と言います。ＡＬ型授業が求められるようになったのは、工業化社会から知識基盤社会へと社会構造が転換し、社会で求められる力が変化してきたためです。20 世紀の工業化社会は、少数のリーダーと多数のフォロワーが必要でした。そのため、学校教育では、忍耐強さ、従順性、協調性の育成が求められ、知識注入型の教育が広がりました。ところが、21 世紀は、絶え間なく新たな知識が生まれ技術革新が起こる知識基盤社会と言われています。高度の専門的な素養・能力を備えた上で、多種多様な分野や文化の人と協働しながら、新しい時代を切り拓いていく能力が求められるようになりました。

旧学習指導要領でも、各教科を通じて「思考力・判断力・表現力の育成」や「言語活動の充実」が強調されていましたが、グローバル化が進むなか、さらに「理解」から「習熟」、「活用」という観点で小中高等学校の学習指導要領が改訂されました。英語授業は 4 技能型へ改善され、高校では、「授業は英語で行うことを基本とする」ことで、教員と生徒がともに英語を使うようになっています。次の指導要領の改訂でも、小学校での教科化、中学で「英語で授業」を行うことと高校で発表、討論、ディベートなど活動の高度化を提案し、生涯にわたって 4 技能を積極的に使えるようになることを目指しています。ＡＬ型授業はこれらを実現する方法として注目され、中央教育審議会の答申にも盛り込まれました。

英語での AL を考えるうえで次の溝上(2014)の定義を見てみましょう。アクティブラーニングは、

> 一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。（下線は発表者）

となります。自分の意見を書くことと同様に、今まで隅に追いやられていたスピーキング能力の育成が大事となります。

平成27年の3年生の1学期に、次のような観点で、コミュニケーション英語Ⅲ教科書を使用し、協同学習手法のジグソー法を進めました。

・知識基盤社会で求められる英語力は、協同学習形態での 4 技能統合型授業で育成される。
・協同学習では PIES の基本理念を保障する。
・ジグソーリーディングは技能を複合的に使用するアクティブラーニングを促進する。

当日は、西本教授の導入の後、この実践の成果と課題をみなさんと共有し、議論したいと思います。